

北海道の 学校図書館

発行 北海道学校図書館協会
会長 小熊 剛彰
事務局長 山口 朱美
<https://hokkaido.sla.gr.jp>
印刷所 株 有 伸 商 会
TEL (011) 814-6211

2025年度 青少年読書感想文全道コンクール 入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第1次、第2次審査を経て、入賞者が決定しました。12月7日(日)に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第71回 青少年読書感想文全道コンクール 特別賞入賞者一覧 第51回 北海道指定図書読書感想文コンクール

北海道知事賞	＊素顔のペルソナ	室蘭市旭ヶ丘小	佐藤	5年
北海道議会議長賞	＊言葉の力	藤女子中	前田	3年
	＊善意の押しつけ	遺愛女子高	齊藤	2年
	＊みんな ちがって、みんないい	札幌市ひばりが丘小	山本	2年
	＊私らしく生きる	伊達市伊達小	笛谷	4年
	＊羽ばたけ！命	札幌市厚別北小	佐々木	5年
	＊「希望」	札幌市中島中	朱里	1年
	＊学ぶ喜びをすべての人に	北海道留萌高	英俊	1年
北海道教育委員会教育長賞	＊みんなちがっていてもいい	苫小牧立拓進小	照子	1年
	＊変身の目的は？	室蘭市旭ヶ丘小	彩薈	2年
	・バリアの中の自分	札幌市真栄小	福田	4年
	・私の証明	岩見沢市光陵中	太田	6年
	・想像力が開く、もう一つの世界	遺愛女子高	サムリノ一	2年
	・することとはなすことは、だいじ。	百合香	吉成	1年
北海道学校図書館協会長賞	・ちいさなエナガとちいさなわたし	函館市中の沢小	夏楓	2年
	・「ぼくの色、見つけた！」を読んで	森町森小	百合香	2年
	・限られた時間の中で生きるということ	函館市中島小	明来	4年
毎日新聞社賞	・本当の幸いを求めて	岩見沢市豊中	今井	6年
	・『思いやりのある世界へ』	遺愛女子高	大和田	2年
	・蜘蛛の糸	函館市中央小	さくら	2年
	・母なる海とともに	室蘭市旭ヶ丘小	佐藤	2年
	・戦争をただの「歴史」にしないため。	函館市北美原	齊藤	3年
	・西の魔女が教えてくれたこと	岩見沢立光陵中	黒田虎土郎	5年
	・「広げようみんなの輪」	帶広柏葉高	高野	3年
北海道読書推進運動協議会長賞	・時代は変わっても	札幌市共栄小	天瀬	2年
	・「きみの友だち」を読んで	留萌市港南中	大玉日華里	2年
北海道青少年育成協会長賞	・心ひとつで変わる幸せ	足寄高	田畠	2年
	・世界はまだ、自分を探している途中	深川市一巳小	福岡	1年
北海道PTA連合会長賞	・弟と私の見え方	白老町白老中	門田	2年
北海道高等学校PTA連合会長賞	・大切なものの	室蘭市旭ヶ丘小	理紗	6年
北海道教育文化協会賞	・『光の粒』を抱きしめて	帯広緑陽高	杉中	2年
北海道学校生活協同組合賞	・ほんとうの幸い	帯広市翔陽中	中津結里香	5年
	・私だけの友だち	帯広緑陽高	横田	3年
	・自分らしさを大切に	室蘭市天神小	須田	1年
	・夢を持てることは当たり前じゃない	音更町鈴蘭小	陽愛	3年
	・下手を相棒に	札幌市伏見小	高橋ひより	1年
	・今を大切に生きることの意味	岩見沢市明成中	佳花	1年
はるにれ賞	・「どちらでも すてきなこと」	遺愛女子高	高橋工藤	4年
教育出版社賞	・個性が輝くために大切なこと	旭川市旭川第三小	美愛	6年
文研出版社賞	・わたしのじっぱいにかんぱいパーティー	室蘭市地球岬小	小夏	2年
北海道図書教材協会賞	・努力の先に	函館市北日吉小	菜恵	3年
図書館ネットワーク賞	・「お昼の放送の時間です」を読んで	苫小牧市拓勇小	耕生	4年
北海教育評論社賞	・「どんなときも 前を向いて」	函館市北日吉小	澤田	5年
光村図書出版社賞	・まけない気持ち	苫小牧市拓勇小	莉空	4年
学校	小学校の部	南幌町南幌小	米田夕季乃	4年
	中学校の部	室蘭市立旭ヶ丘小学校		
	高等学校の部	藤女子中学校		
		遺愛女子高等学校		

*は、全国コンクール応募作品です。（各部から代表～自由1点・課題1点）

北海道知事賞

素顔のペルソナ

室蘭市立旭ヶ丘小学校 5年 佐 藤 杏 奈

「杏奈はペルソナ使いだねえ～。」

母が私に冗談っぽくそう言った。

気になって調べてみると、難しかったが「仮面」という意味だと知った。確かに私は、その人や場面によって見せ方を変えている。家族の前では誰よりお喋りで笑わせ上手な仮面。友達やクラスメイトの前では、その人に合わせたい、聞き手でありたい。親友の前でも親友にだけに見せる仮面がある。仮面の付け替えって良くないことなのかな？全部、私のこうでありたい私自身なのに。

「ぼくがぼくであること。」自分について考えている時、タイトルに魅かれて読んだこの本。主人公の秀一は五人兄弟。母からは兄妹と成績を比べられ、妹からは告げ口されてばかり。秀一は本音だって言い訳だって真剣。でもそれは心の中の声で、実際口から出ている声はそのほんの一部なのが切なく思えた。無理をした我慢の仮面に感じ、きゅうくつに思えた。私にとって自分の仮面はきゅうくつなんかではないのに、急に複雑な気持ちが出始めた。秀一が周りからの扱いにたえられず、家出をしたことにもおどろいた。我慢の仮面には限界があったと思うと、何だか私自身の仮面にもいつか限界が来るようと思えて、そして人からどう映っているかまで意識し、不安になり心がゆれた。

秀一が家出中に泊めてもらっていたおじいさんと夏代の家で、自分で何なんだろうと考えた時、私も一緒に改めて自分のことを考えるように読んだ。秀一は今まで周りに従うがままで、何となく動かされていたことに気付いた。家出中の秀一は、家出前とでは仮面が大きく変わっていて、読んでいくうちに今までの心の声が、自然と口から出るようになり、強くてたくましい6年生の男の子に見えるようになった。

私はこうありたいという仮面を良い意味で使い分けていたけれど、それは仮面ではなく、私の「顔」なんだと感覚が変わった。秀一の家族はお互いの気持ちに気付かず、役割だけの仮面のぶつかり合いで、皆がきゅうくつに感じ、爆発したと思う。仮面が我慢になると、良い結果にはならないと痛感した。

この物語は秀一が母に自身が考える「ぼくがぼくであること」を伝えに行く所で終わる。私も母に伝えたい。母の言ったペルソナは私の仮面だなんて違う。私は自分がこうでありたいと自然に生きている。我慢もあったのかもしれない。笑わせたい、大人しいけど目立ちたい、実は頑固者。全部が私で、見せたい、知ってもらいたい自分。それが「私が私であること」だと今より自信が持てた。きっとまだ私にも気付いていない顔があるのかもしれない。こんな自分もいたんだと、新たな顔に出会えたら、それも上手に受け入れて、「私であること」を成長させていく。私のペルソナは、私の素顔であると強く伝えたくなった。秀一も素顔の自分が伝えられて、その後家族みんなが、素顔で過ごせている事を願った。



『ぼくがぼくであること』

中山 恒／著

(角川つばさ文庫 2012.4刊)

北海道知事賞

言葉の力

藤女子中学校 3年 前田海音

『アンネの日記』は第二次世界大戦中ナチスによるユダヤ人迫害が行われた時代、ユダヤ人の少女アンネ・フランクが、迫害から逃れるために家族を含めた八人で二年間アムステルダムの隠れ家で過ごした生活を綴った記録である。架空の親友「キティ」に宛てる形で綴られる日常は、戦争の悲惨さや理不尽さを浮き彫りにすると同時に人間の強さや尊厳の大切さを教えてくれる。アンネの綴る皮肉とユーモア、鋭い人間観察に私は夢中になった。窮屈な生活での人々が衝突した時は矢も盾もたまらなかった。いちごジャムやソーセージを作る食卓風景はこちらまで美味しい匂いが漂うようで安心した。私と同じ十五歳。戦争という歴史的事実とは別の場所で私はアンネを引き寄せた。ナチスの犠牲になって早逝した少女、という一言では語り尽くせない。

アンネの言葉がせせらぎのように私に流れ込むのを感じていた矢先、「アンネの日記はここで終わっている」という一文で日記は途切れた。もう続きが読めない現実。一人の人間が死ぬ、という重みに押しつぶされそうだ。アンネは「人間は本来、心の奥底では善だと信じています。」と言う。しかし戦争は欲望から起り、欲望は善の対極にあるものだ。アンネの言葉通り人間の本質が善なら、そもそも戦争は起ららず、アンネは生きて夢を叶えたはず。私は歯痒く思い、失意で立ち尽くす。

「誰かのために、できることをする。」私の中に響いたのはミープ・ヒースの言葉だ。自身の命も危険な中、アンネ達を匿った女性。戦争という時代が作り上げたルールに皆が迎合するムードの中、ミープの他にも差別を憎み、生命を尊び、良心に従ってユダヤ人を匿った沢山の人がいたという。大切なことは人間の本質が善か否かではなく、自分の良心に従い、信じる道を選ぶことかもしれない。ミープをはじめとする支援者の真心に触れたからこそ、アンネは人間の本質は善だと信じることができた。そしてそれは信念となり不条理に抗いながら生きる道を探す力となった。

「心に埋もれているものを洗いざらい曝け出したいんです。」というアンネの言葉に驚く。私も常日頃「形にならない心の中の混沌としたものを言葉にしたい」と考えていたからだ。しかし私なら命の保証もない隠れ家生活で、絶望に絡み取られずに綴り続けられるとは思えない。ふと私は自分の入院生活を思い起こす。アンネの日常とは比較にならないが、治療の為の行動制限がある環境で自分と向き合わざるを得ない中、普段なら気づかないことに気づき、それを言葉にしたことがある。どんな逆境も人間の創造力を奪うことはできないことを私は顧みた。アンネは言葉の力を信じ、生きるために綴った。自分がどんな時に笑い、泣き、幸せを感じるのか、大切なものは何か、を祈るような言葉にした。アンネの豊か

な内面世界と強い意志は言葉の力で守られた。私はリアクションありきのテキストメッセージに溢れる現代を思う。私達は想像力をもって行間を感じる力を自ら手放しているかもしれない。小さな齟齬が誰かを傷つけることが大きな争いの火種になることもあるだろう。アンネが願った平和な世界、人が尊重される世界の実現には、言葉の力を再確認することが必要ではないだろうか。

私は決心する。アンネの日記は終わらせない。アンネの「私の望みは死んでもなお生き続けること！」という願いを叶える。ゲシュタボ本部の留置所で、移送列車の中で、そして収容所でアンネはどんな風景を見て何を思い、どれだけの言葉にしたのか。書くことが叶わなかつた言葉の残像を、戦争の事実を知り、引き継ぐ。アンネという人間がどう生きて、どう死んだのかを知り、伝えることが戦争という暴力に対抗する手段だ。なぜ人間は取り返しのつかない過ちを繰り返すのか。そんな思いにとらわれる時、私はアンネが自分の中に生きていることを実感する。今も存在する世界の対立を、自分とは無関係の遠いどこかで行われているいざこざだと他人事で済ませずに、少しでも自らに引き寄せて考えることをアンネは教えてくれた。互いを尊重し、異質を認め合えることを平和と呼ぶなら、私達はわかりあうために言葉を用いて心を寄せ合うことから始めなければならない。

図書館に行くこと。学校に行くこと。夢を叶えること。アンネの願いが全て叶う世界に私は生きている。そして、それがどれだけ特別なのかを知った。私は平和に対して受け身でいることをやめ、主語なく語られる戦争を私の言葉で書き留める。それは小さくとも文化を作ることだ。文化は人と人とを結びつけ、人間の深いところにある「人は尊重されるべきものだ」というアンネの願いを呼び起こすだろう。それは戦争という人間性の危機を乗り越える力になると信じたい。私という人間は弱い。でも無力ではない。人生は意味のある美しいものだと、メッセージを出しつづけよう。きっとアンネに届くように。



『アンネの日記 完全版』
アンネ・フランク／著
深町 真理子／訳
(文芸春秋 1994.4刊)

北海道知事賞

善意の押しつけ

遺愛女子高等学校 2年 齊藤心音

励ましの言葉は、いつでも歓迎されるべき言葉だという世間一般的のムードがある。受験生や闘病中の方々に対し、「頑張れ！」と応援のメッセージを送ることは、その人たちのためになっているに違いない。そう思う人が大半だからだと思う。なぜなら多くの場合、そこには悪意ではなく、純粋な善意が伴っているからだ。あなたの病気が治りますように、あなたの夢が叶いますように。「あなたのため」という言葉が、その行動が、相手の負担になり得るとも知らずに。

この本を手に取るまで、私は「コーダ」という存在すら知らなかった。知らなかったというより、「気にかけることすらなかった」という言葉の方が適しているかもしれない。だから、最初はどういう意味なんだろう？なんていう単なる興味からこの本を選んだに過ぎない。しかし、その興味に従って良かったと読後の今は感じている。なぜなら、作者の五十嵐大さんの見る「世界」は、善意というものに対する私自身の考えを大きく変えるきっかけになったからである。

コーダとは、ろう者・難聴者の親を持ちながら、自分自身は聴力を持つ子供を指す言葉だ。そのため、コーダである子供たちは幼少期から両親のために聴こえる者としての代役を担うことも少なくない。コーダである五十嵐さん自身も、幼い頃から聴こえない両親のために通訳という代役を経験してきた。聴こえる親を持つ子供ばかりの中で幼いながらも通訳に勤しむ五十嵐さんに対し、周囲の大人は、「頑張っていて偉いね」「親を支えるなんて大変だね」と言葉をかけていたという。しかし、そのような言葉に対して五十嵐さんは疑問を抱いた。コーダにとって、通訳をするのは当たり前のこと。それなのに、まるで彼の置かれる環境が重荷であるように扱う大人たちの言葉は、やがて彼自身や他のコーダたちの中に世間との価値観のずれを感じさせ、親を否定する気持ちに苦しむきっかけになってしまう。たったひとつ、聴こえないだけで「ふつうでない」と評価される世界。私はこのエピソードを読み、ふつうとは何なのだろうと考えた。浮かんできたことは平均的であることや、多数派なこと。平均的って誰を対象として？多数派がふつうなら、少数派はふつうではないの？再読する中で改めて考えたことは、きっと一定ではないのだということだ。五十嵐さんの家庭と私の家庭にとってのふつうはきっと違う。学校の友達だって、あるいは祖父母の家庭でさえ全く同じふつうは存在しないのだ。にも関わらず、自分の基準で考え、ラベリングすることは、そんなつもりはないとしても、結果的に相手を苦しめることになるかもしれない。五十嵐さんはそれらの言葉を、「“労い”に包まれた偏見」と称している。私たちはよく相手の立場になって考えようと言われるが、その視点の根本的な見直しを図るべきなのだと思う。その立場を考える土台には、私自身の偏見がきっと含まれてしまっているから。

また作中では、手話自体についても述べている。以前、私は学校で手話について学ぶ機会があった。学習後の振り返りシートを見ると、「ろう者の方々のために、手話を学んでみたい」と書いていた。当時の私は、手話を習得し、少数者であるろう者の方々を助けてあげたいという想いがあったのだろう。しかし作者は、このような視点に対して違和感を覚えるという。そこには手話を一つの言語としてではなく、福祉のためのツールとして見なす、弱者を助けるといった無意識的な「上から目線」が反映されているように感じ取れるからだという。確かに、私自身も手話とは「ろう者が聴者に意思を伝えるためのもの」、いわば通訳の手段という認識だった。しかし、この考えの基盤では常に聴者が優位に考えられている。手話とはろう者にとって英語等と同じく言語の一つであり、聴者のための道具ではない。この例からも分かるように、私たちは聴こえることが優れたことだと考えてしまう癖がある。そのため、「やってあげる」という意識がどうしても抜けない。ろう者の方々にはその意識のもとなされる支援が自己の満足感や承認欲求を満たすためのパフォーマンスに過ぎないと捉えられることもあるのだと気付かされた。

「人のために」という言葉は便利な反面、無責任な言葉だ。自己犠牲的なニュアンスを加えることで相手に対する自らの善意を示すことができる。しかし、その善意の行いが本当に相手が欲していることなのだろうか、という疑問が呈された時、この言葉は途端に無責任なようにも感じられる。もしかしたら、その言葉・行動を相手は欲していないのかもしれない。一方的に相手を追い込み、苦しめるかもしれない。言葉が大きな力を持つこの時代だからこそ、個人間の違いを受け入れ、考え続け、自らの根底を刷新していくことが必要とされているのではないだろうか。



『「コーダ」のぼくが見る世界
——聴こえない親のもとに生まれて』

五十嵐 大／著

(紀伊國屋書店 2024.8刊)

北海道議会議長賞

みんなちがって、みんないい

札幌市立ひばりが丘小学校 2年 山 本 大 起

ぼくは絵をかくことが好きです。水族かんに行ったら魚の絵をかきたくなるし、ゲームをしたらキャラクターの絵をかきたくなります。頭にうかんだことを紙におもいっきり表現できるから楽しいです。

だけど、話すことが苦手です。きれいに発音ができないで二才のときから言語ちょうかく士のリハビリをうけています。友だちにも「なんて言っているかわからないよ。」と言われてしまうこともあります。かなしいです。「上手く話せないぼくがわるいんだ。」と苦しくなることもあります。

でも、この本を読んでゆう気がわきました。男の子がチョウになって、好きなことを全力で表現しているところが一番心にのこりました。友だちにからかわれ、チョウをこわされても「もういっかいつくる」とあきらめません。強い子です。好きなことがあるから強くいられるのかもしれない。そして、いっしょにチョウを作ってくれるお父さんがいたから、もういちどチョウになれたのだと思います。

ぼくも友だちに話したいことを上手くつたえられなくてがっかりしたときには家族から安心をもらいます。お兄ちゃんは、「いっしょに絵をかこう。」といつも言ってくれます。お母さんはそばにいてくれるだけで安心です。

お父さんは、ぼくの元気がないとき、おんぶをしてくれます。だからぼくは「また明日こそ、はっきりとしゃべろう。」とがんばる気持ちがわきます。

ぼくのように苦手なことがあっても、そばにいてくれる人がいて、好きなことがあれば強くいられます。人それぞれ苦手なことも好きなこともちがいます。好きなことがちがっても、「いいね」「すてきだね」と声をかけあえたらもっと楽しい日になります。今まで知らなかった友だちの好きなことを知りたくなりました。話すのは苦手だけど、がんばって聞いてみたいです。ぼくも、ぼくの羽を広げてなんどでもとぶよ！



『チョウになりたい』

マルク・マジュスキ／作・絵
吉井 知代子／訳
(金の星社 2024.9刊)



総評

審査委員長 北海道学校図書館協会副会長 大矢 俊明
(札幌市立北白石中学校校長)

本年度の第71回青少年読書感想文全道コンクール及び第51回北海道指定図書読書感想文コンクールには、北海道各地から全部門合わせて590点の作品が寄せられました。応募してくれた児童生徒の皆さんはもちろん、日頃から図書活動や読書感想文の取組を推進されている教職員と、ご支援いただいている保護者や関係者の皆様に、敬意を表するとともに深く感謝を申し上げます。

このコンクールでは、小学校低・中・高学年、中学校、高等学校の5部門において、総勢21名の審査委員により厳正な審査を行っています。審査委員たちが手にする読書感想文には、児童生徒の思いが詰まっています。そのため、審査をする時には熟議を重ね、丁寧に取り組んでいるつもりです。

さて、読書は単に情報を得るだけではなく、私たちの生活に多岐にわたるメリットをもたらします。読書を通じて様々な分野の知識や情報を吸収するだけでなく、多くの言葉に触れることで語彙力や表現力が向上します。本を読み様々な人生や価値観に触れることで、他者への理解が深まり共感力が育まれたり、批判的な思考力が向上します。これは人間関係を構築する上で、とても大切なスキルになります。まだまだたくさんありますが、これらの点からも読書は非常に有用な活動であると言えます。

今回、各部門で入賞された児童生徒の作品にも、この素晴らしい読書を通して得られた力が溢れています。自分の知らない世界に触れたことによる驚きや喜びを感受性豊かに描いたり、本から得た学びに気付き更に自分なりの考えを重ねている作品が多くありました。また、小学生から中学生、高校生へと成長するにつれて、批判的に考察する力が身に付き、深い思考の下で自分と向き合う作品が増えています。

審査基準の中には、「自分の意見・感想を率直に述べているか」「読書によって得た自己の変革がみられるか」という項目があります。読書感想文は、本のあらすじや作品の概要を紹介するのではなく、本を読んだ「自分」を表現することが大切です。本を通した「自分探し」とも言えます。現代は「活字離れ」の時代と言われています。しかし、児童生徒の皆さんがこれから多くの本と出会うことで、心をより豊かにし、自分を深く見つめる機会を多く作ってほしいと思っています。たくさんの子どもたちが、「読書」に親しみ、自分を成長させてくれることを願っています。

北海道議会議長賞

私たち生きる

伊達市立伊達小学校 4年 笹 谷 朱 里

「おれは、おれのふつうをこわしてみたい だって、ふつうって、新しいことを知れば、かわっていくものだ。」真剣に相手に向き合おうとする勇気あるゆうとの情熱的な決意に、私は強く共感した。

本屋さんで本の帯を眺めていたら、「ふつうって、いったいなんだろ？」の文字が私の目に飛び込んできた。本を手に取ったのは、いつも私が考えている事と同じだったからだ。

登場人物のそうすけは、どこか私と似ている。そうすけは、毎日図書館で勉強することが「ふつう」だ。本に詳しく漢字検定一級を持つ図書館司書のいなばさんを尊敬している。子どもの頃遊ぶことが「ふつう」だったいなばさんは、そんなそうすけを「ふつう」じゃなくてかっこいいと言った。私は、お互いの「ふつう」を尊敬し認め合えるオープンでフラットな二人の関係がとても素敵だと思った。

本を一気に読み終え、冒頭のゆうとの決意を思い出しながら、私は私の「ふつう」をこわせたことがあったかと考えた。私は理科が大好きで、科学館のロボットクラブに所属している。一般的に、機械は男子が得意というイメージがあると思う。リケジョという言葉が存在するように、私にとっては自然なことが一般的ではない場合が日々の生活の中にもある。私は開講時、男子の中でうまくやつていけるのか不安があった。しかし、目に見える部分も、目に見えない部分もそれぞれ違い、魅力的な彼らは、最初から対等に優しく受け入れてくれた。私は、私の個性が発揮できる居場所ができてとても嬉しかった。個人の作品制作で悩んだ時には、自然と自分事としてみんなで共有して相談し合う。学校での困り事や何気ない話なども情報や意見をたくさん交わす。すると、多様な視点を取り入れができるようになり、笑顔と一緒に新たなアイディアが生まれた。私が普段構えて意

識するような一般的な「ふつう」は、私の大切な仲間達にとっては特に気にすることのないごく自然な事だったのかもしれない。お互いを尊重し、認め合える関係がいつもあることで、さらに新たなものを生み出す楽しさやわくわくが湧いてくるのではないかと思う。

「そうすけはそうすけのままでいいんじゃないからって話だよ」

いなばさんの温かい言葉は、私の心に染みこみ、これからの私への力強いエールになった。

新たな発見が、私達の未来にどんな「ふつう」やスタンダードを生み出せるだろう。時代の変化とともに、多くの「ふつう」が変化してきた。私にとっての「ふつう」が今の一般的な「ふつう」とは異なっていたとしても、私は自分の興味関心を探求し続け、将来人類の幸福や地球環境に貢献できることを目指して、今後も研究を続けていきたい。知見を広げ、交流や対話から様々な考え方を取り入れ、私らしさを常にアップデートして活かしていきたい。誰もが生きやすく、平和で幸せな社会になることを願い、私は人生を生き抜く。



『ふみきりペンギン』

おくはら ゆめ／作・絵
(あかね書房 2024. 10刊)

2025年度(令和7年度)北海道の先生がおすすめする本

北海道指定図書

小学校低学年部(1・2年)



なんていいひ

リチャード・ジャクソン／文、スージー・リー／絵
東直子／訳 小学館 1,980円

雨が降る中、子どもたちは大はしゃぎ。雨が止むにつれ、辺りが色々と色づいて包まれ…。「美しい一日」を描いた一冊。



チョウになりたい

マルク・マッシュスキ／作・絵 吉井 知代子／訳
金の星社 1,760円

チョウになっている自分が好き。それをからかう子どもたちもいて嫌になることもあるけど、パパが応援してくれているから…。



くじらのいるこみち

塙野 米松／文 はた こうしろう／絵
農文協 1,650円

住宅街の外にある土の道。近所に越してきたゆかちゃんはこの道が大好き。雨のあと、水たまりにたくさん魚があらわれて…。



ぞうのうんちはまわる

重松 順佐／文 しろべこり／絵
新日本出版社 1,540円

4頭ぞうのうんちは量は1日でなんと400キロ。うんちはいひにかえて、動物園には緑がしげり、野菜が育つ。

小学校中学年部(3・4年)



いつも仲間といっしょ エナガのくらし

東郷 なりさ／作 江口 欣照／写真
文一総合出版 2,200円

エナガは身近な公園でも見られる五百円玉ほどの重さのかわいい小鳥。ちょっと変わった暮らしをのぞいてみましょう。



動物の義足やさん

沢田 俊子／文
講談社 1,650円

作った義足は3万匹分。専門家がない中、動物のための義足づくりにチャレンジしてきた島田旭緒さんの活動をご紹介!



タケシのせかい

室井 滋／文 長谷川 義史／絵
アリス館 1,650円

秘密の箱を開けるとパパからの手紙が。いろいろな人がそれぞれを認め合うことに気づく。「ウェルビーイング」の絵本。

小学校高学年部(5・6年)



ブルーラインから、はるか

林 けんじろう／作 坂内 拓／絵
講談社 1,540円

ほとんど話したことのない後輩からの頼みは、「しまなみ海道」をチャリで渡りきること。夏を駆け抜けける青春ロードノベル!



ぼくとロボ型フレンド

サイモン・パックム／著 千葉 茂樹／訳
あすなろ文房 1,980円

过度の心配性や不登校の児童の気持ちがリアルに描かれ、彼らが演劇を通して成長していく感動の物語。



ぼくたちのことをわすれないで ロビンギヤの男の子 ハールンのものがたり

由美村 婉々／作 鈴木 まもる／絵
佼成出版社 1,650円

故郷のキャンマーで迫害を受け、隣国パングラデシュの難民キャンプに暮らすロビンギヤの人びとの現状を伝えます。

中学校の部



わたしは食べるのが下手

天川 栄人／作

小峰書店 1,760円

会食恐怖症と損食障害。二人の少女がたどり着いた正しい“食”との向き合い方とは。わたしたちが望む給食って何だろう?



光の粒が舞いあがる

蒼沼 洋人／著

PHP研究所 1,430円

母子家庭で何事にも打ち込めない心愛と、父子家庭でボクシングにしか打ち込めないこはく。出会いと成長の青春小説。

北海道の本を読みましょう!

第71回 青少年読書感想文コンクール 第51回 北海道指定図書読書感想文コンクール

■主催／北海道学校図書館協会・毎日新聞社北海道支社

■後援／北海道・北海道議会・北海道教育委員会・公益財団法人北海道青少年育成協会 ■選定協力／北海道読書推進運動協議会

感想文は夏休み明けに、学校に出してください。詳しくは、「応募のきまり」をご覧ください。 ●ホームページ 北海道学校図書協会 検索



優秀賞

小学校（低学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学 年
「すきとにかくでHAPPYのわ」	市 川 晴 啓	教育大附属旭川小	1 年
「こまったくさんのスパゲティ」をよんで	辻 桜 花	教育大附属旭川小	1 年
大すきなシマフクロウ	茂 田 健太郎	教育大附属旭川小	1 年
伝えようとする気もち、わかりたいと思う気もち	阿 部 遼	教育大附属函館小	1 年
みんなともだち	濱 中 佳 乃	室蘭市天神小	2 年
小さなゆう気、大きなともだち	古 田 大 瞳	帯広市つつじが丘小	1 年
「しる」ことは だいじ	小 林 咲 良	増毛町増毛小	1 年
なかよくできたね	波 田 旺 大	函館市北美原小	2 年
「ライオンのくにのネズミ」を読んで	菅 原 迪 音	帯広市光南小	2 年
「くじらのいるこみち」を読んで	福 士 都	室蘭市天神小	2 年
雨の日だけど、なんていいひ	石 原 旭 陽	室蘭市蘭北小	2 年
「生まれかわるごみ」	大 塚 陽 希	小樽市山の手小	2 年

小学校（中学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学 年
生きる。	山 田 朝 陽	札幌市新川中央小	4 年
命を大切にしたい	村 上 景 悟	札幌市伏見小	3 年
平和のために 私たちにできること	芦 谷 和 花	帯広市明和小	4 年
「十五少年漂流記」を読んで	干 場 結 貴	旭川市緑が丘小	4 年
地球と私の未来	安 達 梨 花	札幌市平岡公園小	4 年
「ふみきりの向こう」	本 間 晴 華	教育大附属旭川小	4 年
私たちがあぶない	斎 藤 花菜子	旭川市新富小	4 年
消えてしまう前に 守りたいもの	須 田 陽 暖	帯広市帯広小	4 年
「助けあう心、思いやる気持ち」	佐 藤 う た	室蘭市海陽小	3 年
「動物の義足やさん」を読んで	大 和 田 悠 斗	函館市中島小	3 年
動物の義足やさんを読んで	川 内 谷 航	函館市柏野小	4 年
逆のものを付けくわえると	大 野 莉 央	室蘭市白蘭学園	4 年

小学校（高学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学 年
自分自身を受け止めて	八 幡 一 権	留萌市東光小	5 年
「いいたいことがあります！」を読んで	山 田 う み	札幌市新川中央小	6 年
戦没学生が教えてくれた戦争の本当の被害者	奥 田 淳 太	苫小牧市澄川小	6 年
「トクベツキューカ、はじめました！」を読んで	田 邊 杏 莉	旭川市北鎮小	6 年
環境保全を考えてゆく	茂 田 さ く ら	教育大附属旭川小	6 年
『「知る」ということが私に教えてくれたこと』	伊 田 陽 咲	岩見沢市中央小	5 年
きっと見つかる私のララ	山 崎 穂 夏	札幌市明園小	5 年
あきらめの のろいをこえて	柚 木 晃 太 郎	旭川市神楽小	5 年
「僕の夢、見つけた」	田 嶋 新	苫小牧市若草小	6 年
「ぼくだけの色」	京 極 聖 空	苫小牧市拓勇小	5 年
「ぼくの色、見つけた！」を読んで	岡 山 陽 哉	士別市士別南小	6 年
「ララ」を見つけるきっかけは	斎 藤 灯 里	室蘭市海陽小	6 年

中学校の部 (15名)

作品名	氏名	学校名	学年
友だちと仲間	熊澤 陽葵	室蘭市港北中	3年
言葉のプレゼント	池田 暖	登別明日中等教育学校	2回生
「スラムに水は流れない」を読んで	村瀬 心祢	遺愛女子中	3年
戦争のない星空を見上げたい	河合 笑里	遺愛女子中	1年
「自分」	奈良 涼花	藤女子中	2年
わたしは生きるのが下手	本多 祐実香	安平町追分中	1年
大切なのち	前田 有凜	白老町白老中	2年
「人生の歩み方」	中村 怜那	滝川市明苑中	3年
「当たり前」の尊さ	小泉 真歩	小樽市菁園中	3年
ソーピーと僕	東海林 達	登別明日中等教育学校	2回生
「生きる」を知った私	田邊 勘太	小樽市松ヶ枝中	2年
不確かな「当たり前」	佐々木 正明	札幌市厚別北中	1年
「私は起きるのが下手」だけど…	角田 梨	遺愛女子中	3年
食べるのが下手でも、まあいいか	田邊 ももこ	室蘭市港北中	2年
真剣に考えて	今津 妃由璃	白老町白老中	2年

高等学校の部 (10名)

作品名	氏名	学校名	学年
むらさきスカートの女を読んで	山本 優育	帯広緑陽高	3年
「火花」を読んで	吉國 彰真	帯広南商業高	1年
あなたは一人ではありません	朽木 柏奈	遺愛女子高	2年
自分の道	藤田 康育	士別翔雲高	3年
「汝、星のごとく」を読んで	滝本 幸加	鹿追高	2年
ほんとうの幸い	赤澤 里緒	遺愛女子高	1年
家族の愛	高嶋 優羽	帯広緑陽高	3年
無意識の差別に気づかされた本	北見 文蘭	函館白百合学園高	2年
違いを認める	長畠 潤	函館西高	2年
コーダが教えてくれたこと	小椋 望夢	帯広大谷高	3年



◆感想文集『北海道の読書』(令和7年度版)の普及を!

第71回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

○小学校・中学校・高等学校上位入賞者の作品を掲載！（価格税込：1,500円）
【申し込み・問い合わせ】

北海道学校図書館HP > 読書感想文コンクール > 北海道の読書 > 学校宛・個人

札幌市立藻岩小学校 教諭 佐藤秀則 メールアドレス hidenori.sato@sapporo-c.ed.jp

FAX 011-571-3831

■12月28日までに「北海道学校図書館協会文集会計」宛に、申込・送金をお願いします。
1月下旬にお届けを予定しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。
締切を過ぎての申込の場合、2月下旬のお届けとなります。

優 良 賞

小学校（低学年）の部

別海町立別海中央小	2年	福岡 夢絵
室蘭市立旭ヶ丘小	2年	佐藤 麗
苫小牧市立豊川小	2年	小野 愛奈
室蘭市立蘭北小	1年	安田 有紀
旭川市立高台小	2年	佐藤 光
室蘭市立海陽小	1年	寺澤 謙
室蘭市立旭ヶ丘小	1年	田澤 和佳
室蘭市立旭ヶ丘小	1年	片山 智尋
苫小牧市立ウトナイ小	2年	三上 雄大
旭川市立新富小	1年	斎藤 彩花子
留萌市立留萌小	2年	米倉 晴飛
室蘭市立地球岬小	2年	齊藤 漆桜
室蘭市立天神小	1年	南川 安音
札幌市立信濃小	1年	杉本菜々花
岩見沢市立日の出小	2年	藤枝 芽生
札幌市立桑園小	1年	小川 紗良
美幌町立美幌小	2年	中川 凜
旭川市立旭川第三小	1年	喜多 心
室蘭市立八丁平小	2年	村山 奏多
札幌市立鴻城小	1年	田山 智悠

室蘭市立白蘭学園	4年	松岡千結莉
室蘭市立旭ヶ丘小	3年	川島 優依
旭川市立緑新小	4年	菅原ゆうか
室蘭市立旭ヶ丘小	4年	福岡 怜奈
旭川市立知新小	4年	山田 渉睦
室蘭市立蘭北小	4年	石原 陽琉

帯広市立翔陽中	3年	須田 陽向
室蘭市立白蘭学園	3年	山田つぐみ
白老町立白老中	2年	森 友花
白老町立白老中	3年	大柳 樹
旭川市立神楽中	1年	柚木 紗南
岩見沢市立緑中	3年	中川 愛子
教育大学附属旭川中	3年	平松 昊
苫小牧市立沼ノ端中	2年	工藤 彩蒼
札幌市立八軒東中	2年	小箱 都乃
函館市立巴中	3年	柿崎 美昊
滝川市立江陵中	2年	野口 初音
函館市立本通中	1年	水野 寧々
札幌市立向陵中	2年	山口 結愛
札幌市立向陵中	2年	山口 仁葵
士別市立士別南中	1年	菅原 向夏
岩見沢市立豊中	3年	金澤 木詠
滝川市立明苑中	1年	梅田 七緒
美唄市立美唄中	2年	壽盛 心空

小学校（中学年）の部

小樽市立高島小	4年	村上 太一
岩見沢市立南小	4年	福村 偉生
苫小牧市立ウトナイ小	4年	大田 友祐
苫小牧市立澄川小	3年	山村 花
室蘭市立海陽小	4年	路奥 杏
函館市立深堀小	3年	高橋 耀
帯広市立帯広小	3年	長尾 真和
札幌市立北園小	3年	佐藤 有紀
札幌市立ひばりが丘小	3年	山口 莉陽
室蘭市立みなと小	4年	一家 結唯
函館市立大森浜小	3年	輪島 莉乃
苫小牧市立拓進小	4年	田野 葉紺
苫小牧市立豊川小	3年	西多 蘭
札幌市立平岡公園小	4年	井川 真宏

小学校（高学年）の部

苫小牧市立拓勇小	5年	荒井 結芽
函館市立北美原小	6年	小野寺葉樹
旭川市立近文小	6年	秋葉ひなみ
室蘭市立八丁平小	6年	四方 韶
旭川市立神楽岡小	6年	中佐藤昊愛
旭川市立忠和小	5年	林 澄那
函館市立鍛神小	5年	和泉 華蓮
札幌市立北九条小	6年	岩原 旺佑
旭川市立北鎮小	6年	荒木 和音
室蘭市立蘭北小	5年	小川 隼史
函館市立中の沢小	5年	片岡里依紗
室蘭市立旭ヶ丘小	5年	黒田 龍平
函館市立中央小	5年	光銭 恵太
増毛町立増毛小	6年	高山 広幸
札幌市立発寒南小	6年	岩本 彩良
留萌市立緑丘小	5年	野上 音
旭川市立北鎮小	6年	川口 莉央
富良野市立扇山小	6年	齋藤 旭
旭川市立未広北小	6年	窪田こはる
室蘭市立旭ヶ丘小	6年	太田 悠翔

高等学校の部

士別翔雲高	2年	狩野真理亜
芽室高	2年	富原 蒼士
芽室高	1年	中村 紗
遺愛女子高	2年	筑田 琴子
士別翔雲高	2年	高橋 柚羽
遺愛女子高	1年	岡部菜々実
帯広柏葉高	2年	横澤 紗映
士別翔雲高	3年	工藤 真夕
帯広綠陽高	3年	濱 杜季乃
帯広綠陽高	3年	中谷 有結
帯広綠陽高	3年	川上 愛
遺愛女子高	1年	上坂 桜瑞
帯広柏葉高	2年	松本 七虹
帯広柏葉高	1年	西田 結羽
帯広柏葉高	2年	本間 裕喜
遺愛女子高	2年	福田 愛恵

北海道高文連第47回全道高等学校学校図書研究大会（上川大会）報告

北海道高文連図書専門委員 加藤孝志

（北海道小樽未来創造高等学校司書教諭）

全道の学校図書館づくりに関わる高校生が集い、学びと交流を深める全道高校図書研究大会が、9月25日（木）・26日（金）、「たいせつに紡ぐ 大雪の一葉（ページ）」をテーマに旭川市で開催されました。第47回となる今年は、全道86校から生徒380名、教職員129名の計509名、さらに長崎県・神奈川県の4校4名の生徒も参加しました。

1日目は開会式に続き、「図書館活動（T-1）グランプリ2025」が行われました。一次予選を突破した9校が、学校図書館での日々の活動や成果を5分間のステージで発表しました。図書館報の発行、展示や装飾の工夫、地域図書館との連携、創作コンテストの開催、交流イベントや協働企画など、多彩な実践を紹介。学校図書館を「集い、学び、つながる空間」として育てようとする思いのこもった発表に、会場から大きな拍手が送られました。生徒投票の結果、今年度のグランプリは市立札幌大通高等学校に決まりました。

午後には、ノンフィクション作家・片野ゆか氏による記念講演が行われました。動物と人との関係を描いた作品の取材秘話、膨大な資料を整理し物語へと編み上げる方法、コミック化・映像化の舞台裏などが語られ、生徒たちは「伝える」ことの難しさと面白さに引き込まれていました。質問にも丁寧に答えていただき、言葉を扱う活動への視野が大きく広がる時間となりました。

2日目は、14のテーマ別分科会に分かれ、旭川ゆかりの文学館見学、読み聞かせやコミュニケーション体験、POP・しおり・蔵書印の制作、ビブリオバトルや回し読み新聞など、多様なワークショップで学びを深めました。最後には図書館報コンクール・ほっかいどうPOPフェスタの表彰が行われました。

本大会は、生徒が主体的に学校図書館を創り上げる実践を共有し、互いの活動を高め合う貴重な場です。その広がりは他県の高文連にも注目され、全国へ波及しつつあります。来年は北見市で第48回大会が開催されます。全道の生徒がさらに生き生きと学び合う場となることを期待しています。

第45回北海道子どもの本のつどいを終えて

北海道子どもの本連絡会 事務局 沼 田 陽 子

第45回北海道子どもの本のつどい札幌大会を開催いたしました。座談会は北海道在住の絵本作家3名、かとうまふみさん、堀川真さん、小寺卓矢さんによる座談会「北海道で子どもの本をつくる」というテーマでお話をいただきました。北海道で創作活動をすることの意味や想像の種についてそれぞれの想いを聞くことができました。ちなみに『北海道わくわく地図絵本』(堀川真:作 北海道新聞社 初版2006年)は、定期的に内容を刷新しているそうです。ただ、奥付の刷・版表示は改訂されず、内容だけが刷新されているということです。学校図書館、学級文庫に初版がありましたら、できれば買い替えをおすすめします。この本はカントリーサインの一覧掲載されている唯一の本なので、調べ学習や自由研究におすすめです。その後は分科会を行いました。第1分科会は、編集者的小野明さんに絵本編集者の仕事、絵本の絵に込められた謎について具体的に解説していただきました。第2分科会は学校司書の交流会として、学校司書の仕事を紹介しながら、やりがいや悩みなどをグループで共有しました。こちらは時間が足りなくなるほど、仕事に対する情熱を共にした時間でした。第3分科会は持ち寄り読書会で「好きな子どもの本」を紹介していました。それぞれが思い入れの強い作品を持ち寄ったことで、知らなかった本への出会いや紹介者の人柄が伝わるようなスピーチがとても印象的でした。どの分科会も発見と共感があった充実した時間を持つことができました。そして、北海道子どもの本連絡会は、今年活動50周年を迎えました。北海道学校図書館協会のみなさまにもさまざまな活動を通じて、ご尽力とご協力を賜り感謝申し上げます。書き手・読み手・渡し手がゆるやかに連携しながら、子どもの本や読書環境について興味関心を持ち続けたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

支部だより●旭川支部●

旭川学校図書館協会では、本年度の旭川学校図書館協会支部のテーマを「学びを支え、豊かな心を育む学校図書館」と設定し、研究を進めています。子どもたちが本を通して学びを広げ、心を育んでいくために、学校図書館の充実は欠かせません。旭川支部では、学校現場と図書館がより深く結びつき、子どもたち一人一人の学びを支えられるよう、さまざまな事業と研修を進めてきました。

主な事業は以下の通りです。「司書教諭・学校図書館担当者研修会」を開催し、今年度はマニュアルの追録についての説明を行いました。「旭川市児童生徒読書感想文コンクール」では、旭川市教育研究会学校図書館部員と旭川氏学校図書館協会連絡員が審査を行い、旭川中央図書館と連携して表彰式を行っています。「旭川市親子で本の紹介コンテスト」では、市内の小学生を対象に親子で1つの本を紹介して交流しています。また、「中学生作文コンクール」への審査協力も行っています。

読書を通して感じたことを言葉にする子どもたちや、親子で本を紹介し合う姿に、学びと心の豊かさを実感する機会となっています。

研修活動としては、「旭川市学校図書館運営マニュアル」の運用開始により、学校図書館の整備と活用を体系的に支援しました。旭川市小中学校教育研究大会では「学校図書館部会」と連携し、実践交流を通して図書館活用の可能性を広げました。北海道学校図書館研究大会への参加では、全道の取組とつながり、旭川の実践を発信しました。

さらに「特別支援教育における読書指導の実践」をテーマに、すべての子どもが本と出会う喜びを感じられるような支援のあり方を学びました。

これからも、司書教諭・学校司書・教員が互いに連携しながら、子どもたちの学びと心を支える学校図書館づくりを進めていきます。一人でも多くの子どもが「本が好き」「調べるって楽しい」と感じられるよう、旭川の学校図書館の灯をさらにあたたかく広げていきたいと思います。



学校図書館情報

◆第53回HBC中学生作文コンクール審査終了

各地区からの作品応募や審査協力をいただきましてありがとうございました。今回のコンクールでは「○○が存在しない世界」をテーマに、前回コンクールを大きく上回る応募数があり、審査にも熱が入りました。

【表彰式の予定】※各日30分前集合

中央表彰式、札幌・道央地区：1月6日（火）13時開催
北洋大通センター4階 セミナーホール
道北地区：1月7日（水）13時開催

旭川北洋ビル8階 小ホール
道南地区：1月9日（金）13時開催
函館北洋ビル8階 ホール

日胆地区：1月10日（土）13時開催
室蘭プリンスホテル4階 桃山の間
道東地区：1月13日（火）13時開催

北洋銀行釧路中央支店3階 会議室

◆第58回北海道学校図書館研修講座のご案内

・1月6日（火）～7日（水）2日間日程

北海道立道民活動センター（かでる2・7）

6日（火）開講式・全体講演・選択講座・指導者研修
講座・懇親会

7日（水）校種別選択講座（討議）・指導者研修講座・
閉講式

・講演：「新たな学習指導要領の改訂に向けた議論の動
向と学校図書館に期待される役割」

講師：文部科学省初等中等教育局 高見英樹 氏

・参加費：3,500円

講演のみ参加 1,500円

1日のみ参加 2,000円

・申込：12月1日（月）～18日（木）の期間にイベン
ト申込サービスPeatixにて。

詳細は要項（HPにも掲載）をご覧ください。たくさん
のご参加をお待ちしています。（1日目終了後、本の
話や図書館の悩みなどを気軽に話し合える機会として、
懇親会も予定しております。）

◆第56回「学校図書館賞」にご応募を！

本賞は学校図書館に関する運動の部（学校図書館運動
の推進）、論文の部（学校図書館に関する著作・論文）、
実践の部（学校図書館の実践活動）の三部に分けて授賞
されます。詳しくは全国SLAのHPをご覧ください。

応募期間2025年10月1日～2026年1月30日

◆「北海道の読書」の販売拡大の取組を

今号機関紙の発送に合わせて、読書感想文コンクール
作品集「北海道の読書」の申込チラシをお送りいたします。各学校で印刷をして各家庭に案内していただけます
よう働きかけをお願いいたします。全校種の優秀な作品
を多数掲載しております。

事務局

事務局長 山口 朱美（札幌市立福井野小学校教頭）

事務局校 札幌市立福井野小学校

〒063-0012 札幌市西区福井6丁目11番1号

TEL 011-664-5551 FAX 011-661-9471

Amenity B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティBコート」
ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも
塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。
ご指定の上ご愛用下さい。

キハラ株式会社

〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15

T E L (011) 857-3331

F A X (011) 857-5211

◆新刊紹介

①『学校図書館活用の考え方と 実践例』

堀川照代 編著 樹村房

2025年7月30日 刊行

ISBN978-4-88367-410-7

B5判 216頁

定価 2,750円

（本体2,500円+税10%）



②『学校図書館を活用した 楽しい読書ワーク』

木下通子 編著 学事出版

2025年7月28日 刊行

ISBN978-4-761930-769

A5判 132頁

定価 2,420円

（本体2,200円+税10%）



<紹介>

① 学校図書館に関わる研究者・司書教諭・学校司書・
公共図書館員が現場で取り組んできたさまざまな理
論や実践報告を集成。

② 読書が苦手な子でも楽しめる、言葉の面白さを知
る、探究学習の土台となる楽しいワークが盛りだく
さん！授業で使えるワークシート付

編集後記

本号は第71回青少年読書感想文全道コンクールの特
集号です。今年も全道各地から600点を超える応募があ
りました。保護者様、学校関係者様をはじめご指導に当
たられた皆様に感謝いたします。本協会も、子どもたち
の読書活動と、感動を言葉で表現することを支援してい
きたいと思います。

（編集：村山 知成 野村 邦重
大久保 雅人 山口 朱美）

—ホームページアドレス—

<https://hokkaido.sla.gr.jp>